『Mちゃんの地域包括ケア』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

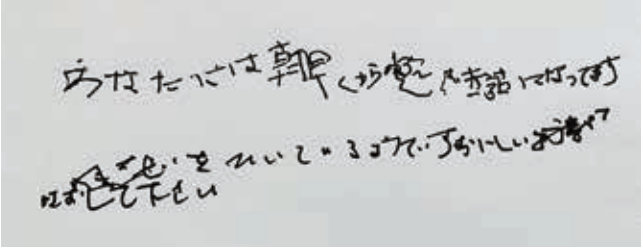
国が旗を振って推し進めようとしてきた（現在も推進中の）「地域包括ケア」を完成させるために、在宅医療はなくてはならない働きだが、今から約6年前の平成28年春、この地域にはなかった在宅医療を私が始めた頃、ちょうど時期を同じくして、「地域包括ケア」を推進する大事な役目に任じられたのが伊達市役所のMさんである。その後、Mさんは課長として、さらには伊達市における女性初の部長として、見事にその期待に応え、この地域の「地域包括ケア」を一気に推し進めた。現場をよく知っているMさんの言葉には説得力があったし、女性ならではの細やかな気配りをされながら、この地域の歴史に残るお仕事をされたと思う。

十分に仕事をやり切ったと感じたMさんが、定年前に市役所を退職することを決断し、クリニックに挨拶に来られたのが、退職直前の令和3年3月。そして、Mさんのお母様である秀子（仮名）さんが、転びやすくなるなど、様子がおかしくなってきたのはその直後からだった。最初は84歳という歳のせいとさほど気にもせず、在職中は多忙を極めていたMさんだったので、時間ができて久し振りに親子水いらず一緒に旅行に行ったりしていた。

しかし、秀子さんの状態は歳のせいでは説明がつかない程に急速に悪化し、8月末に日赤の神経内科を受診し精査。結果、治癒不能の神経難病と診断された。秀子さんは、衰えを知らない明晰な頭脳で、松岡医師の説明をしっかりと理解した上で、気管切開をして人工呼吸器に繋がれることや胃瘻を造って栄養を入れることを拒否した。入院中のある日、秀子さんは、娘のMさんから使い方の詳しい説明を書いた紙と共に手渡されていた携帯電話を医療者に隠れて人生で初めて使い、病室からMさんに「助けて！」とSOSの電話をかけてきた。もはや限られた命と覚悟を決めた親子は、直ちに退院の手筈を整え、そこで初めて私にも連絡が入った。退院の時点で、家族は松岡医師から「残された時間は週から月の単位」との説明を受けた。その見立て通り、9月6日の私たち在宅チームの初回訪問から数えて約1か月後の10月4日、秀子さんは大勢の家族に囲まれて人生の幕を閉じた。

秀子さんは最後の最後までしっかり者だった。初回訪問の際、部屋の明かりをつけずに隣の部屋で在宅チームと家族が色々と話し合っていたら、ブザーを押して来られたので、Mさんが秀子さんのところに用を伺いに行ったところ、部屋の灯りをつけなさい、と秀子さんからジェスチャーで指示されたりもした。また、亡くなる前日の10月3日午前2時半頃から、つきっきりで介護にあたっていたMさんの掌に指で書いてこんなメッセージを伝えた。「たくさんありがとう みんな仲良く 地道にまじめに Mちゃんこれまでありがとう」そして、さらにその後、自分で実際にペンを持ち、この時期少し鼻をすすったりしていたMさんに対して、震える文字でこんな言葉（結果的には絶筆）を書き遺してくれた。「あなたには朝早くからよる遅くまでお世話になってます かぜをひいているようです おいしいものを食べてなおして下さい」自らの命の火が消えようとしている状態にあってなお、母親は娘の身体を心配するのだった。

（秀子さんの絶筆↓）



このような展開をMさんはもちろん全く予測していなかったが、それにしてもなんというタイミングで仕事をお辞めになられたことかと、改めて思う。そして、自分が粉骨砕身作り上げてきた「地域包括ケア」の成果をこんな形で自ら享受することになろうとは。秀子さんにとって、「Mちゃん」は、愛おしいだけでなく、本当に誇らしい自慢の娘だったに違いない。